

Title	傳説の月物語り：仲秋の名月, 月下の雅筵, 月と兎, 芋名月のことなど
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1934), 14(161): 429-432
Issue Date	1934-08-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/166870
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

傳説の月物語り

仲秋の名月、月下の雅筵

月と兎、芋名月のこなご

春訪れて花を偲び、秋の半ばに月を想ふのも、人の優しい心持ちと云ふべきであらう。

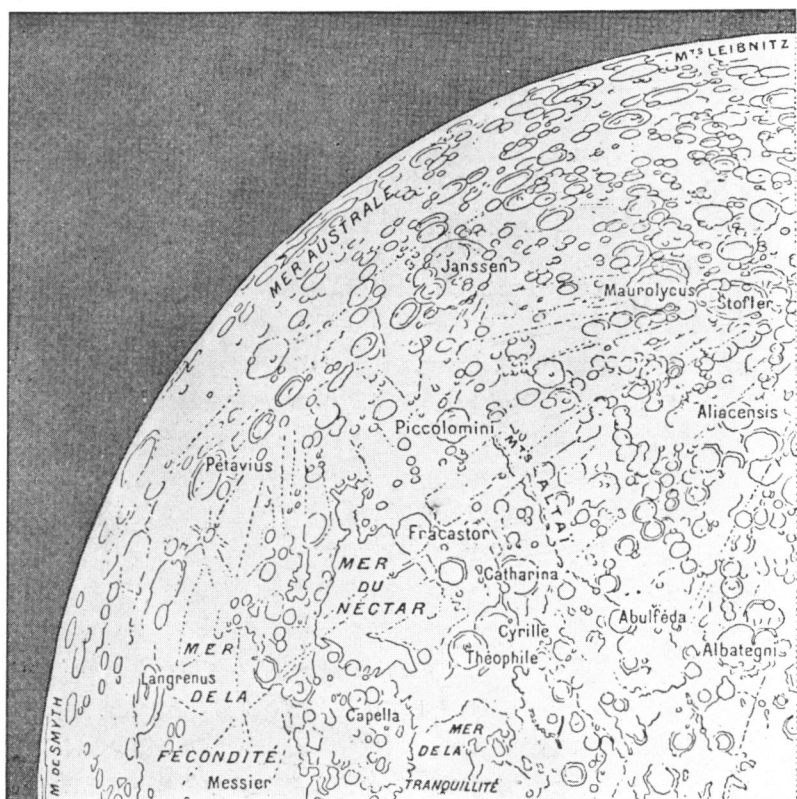
仲秋の観月、ほんとうは舊暦の八月十五日、及び、九月十三日夜を「名月」として、清く澄み渡つた月を觀賞するのが古來のしきたりであるといふ。近世は所により、又家々によつて、八月の満月即ち多く舊七月十五日夜の月を名月と呼び、観月の時機とする人もある。吾等は二三の古老碩學に就いてこの傳説の月物語りを尋ね綜合してこれを夏の夜樹下の語り草として下に紹介する。

初秋の夜ぞらに、紺青の大空に流るゝ月の影は何となく詩的である。

だが、この風流も、元をたゞすと、矢張り唐人を真似たもので、支那では既に漢時代から行はれ、そして唐代が最も盛んであつたと云ふ。故にその後の支那の詩人墨客が、これを吟詠したものは數限りなく、名吟玉詠、いま珠玉となつて愛誦されてゐる「三五夜中新月色二千里外故人心」と云ふ白樂天の詩などは、我が國でも廣く人口に膾炙されて唐使として行つた安部仲麿の「大海原ふりさげ見れば」の歌を始めとしゐる。遣て、却々名歌が多い。



この雅びやかな月夜の雅筵など日本に傳來したのは果していつ頃からであるか、甚だ明瞭を缺くが、醍醐天皇の寛平九年に始めて大内にて観月の事ありと傳へられてゐる。然し又一説には、それよりずつと以前、人皇五十二代嵯峨天皇の御時、天照大神のお告げで京都東山の如意ヶ嶽に日高見宮を祀つて、魚肉を供へたのが月待ちの事始めだとも云ふし、民間では清和天皇の貞觀四年、菅公の師であつた島田忠臣の催したのを以てその祖とするとも云はれるが、眞偽の程は保證し難い。兎に角、雲月花と並び稱されてかなり古くから傳つたことだけは確だ。

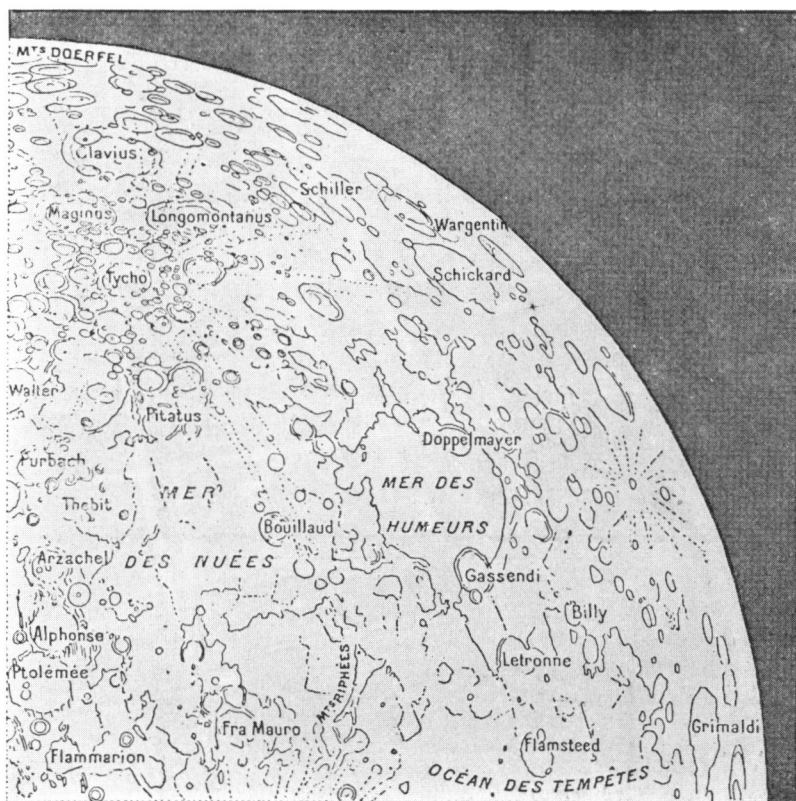


(月の西南部)

藤原時代には観月の宴も上下の間に盛んに行はれ白河上皇は鳥羽殿に月卿雲客を召して小舟に分乗し、明月に棹さして詩歌管絃に心行くまで一夕を過し給ふたことなど記されてある。鎌倉時代にも京都では、建保五年、貢永元年、文永二年、永仁五年などに名月の下で盛んに歌會が開かれた。

當時民間では、月輪を、極めて臆げな信念から、いつとはなくこれを神祕視するやうになり、観月よりも寧ろ月を祭ると云ふ風に變り、芒や枝豆、芋など節物を獻じて終夜痛飲したりすることも始つた。

江戸時代に入つてから、この日にだん子を作ることが行はれ、更に秋草を供へる様になつたが、關西地方ではだん子のつくり方や秋草の



(月の東南部)

組み合わせなど少し異にしてゐる。



特に芋名月などと呼ぶが、一體月と芋と何程の関係があるのか？それは昔、ある乙女がふと十五夜に芋に箸をつきさして、その孔を通して月を眺めた歌を詠んだと云ふたはいもないことから月と芋とが結びつけられたものらしいが、いかにものんびりとした其の頃の人の心がうかゞはれて面白い。客年の御宴には茄子に萩の箸で孔をあけて空の月を眺められたと傳へられてゐる。

月のローマンスとしては、いろいろな言ひ傳へがある。印度では月の中に美しい宮殿があつて、四方の垣は七寶で作られ、水晶の玉を月

光で照すと水が清らかに湧くと云はれ、支那では弓の名人「羆」と云ふ人の妻で美人の嫦娥が良人の秘蔵の不死の靈藥をぬすんで月に飛んで行つたら、その罰で墓になつてしまつたと云ふ話がある。

印度の傳説である「月の桂」とか「兎と月」とかについても噴き出すやうな珍談がある。太古、帝釋天が老翁に化けて狐と猿と兎の許を訪ねた。すると狐は鯉に、猿は果實にと、めいめい御馳走を出したが、兎は相憎く何の馳走も持ち合せしなかつた。兎はそれを苦に病んで遂に自分のからだをたべてくれと云ひ残して火中に飛び込んだ。帝釋天はその俠骨と純美な心情に感激して、兎の死骸を月に捧げたとのことから、月と兎の話が生れたのである。

また、月の中に五百丈の桂の木があつて、その枝を一人の仙人が伐りはじめたが、彼が下界に在るときの罪から、いくら切つても伐りつくせなかつたと云ふ「月の桂」もこれが始まりである。

(月の圖の残りは來月號に)

月の表情美を探る

近代的な月見をやらうと云ふ世話人たちの主催で花山天文臺見學が企てられた。満月より二三日前の方が絶好の表情美を示すと云ふので去る1933年九月廿九日の夕暮、一行約卅名自動車に分乗して天文臺に向ふ。

花山は京都の街から云ふと恰度、圓山と將軍塚山の背後の松山で、高さ 220 米、山科の町を眼下にしてゐる。自動車は松林を切開いて作つた恐しく急峻なジグザグの山道を、乗つてゐるものをハラハラさせながら、そのまゝ頂上の天文臺の前迄一氣に來てしまふから便利なものだ。

こゝ迄上ると空氣が晩秋のやうに冷めたく爽かに澄み切つてゐるのをハツキリ感じる。(後できいたのだが、市内より氣溫ずつと低く、金澤あたりの氣候とそつくりの由) 建物は圓蓋堂のついた本館、別館、子午儀室、太陽觀測室の四つ、皆眞白だ。本館は例のメンデルスゾーン作「アインシュタイン記念塔」を想はせる鐵筋コンクリートの建物、前に白亜の三角測量塔が水のやうな空に聳えて、夕月をお手玉にとつてゐると云つた近代風景で、感覺をそゝる畫面を構成してゐた。

本館圖書室で秋葉理學士より山本一清博士を紹介され、博士より當天文臺の由來、現状、目的に就て一時間近く講話を謹聴、それから別建になつてゐる子午儀室に行つて正確な地方時を標定する子午儀を見學、測量者の體溫の影響から狂のこないやうに寒中に爆風機をかけて體溫を散らすとか、毛髮一本絡まつてゐたゝめ千萬分の一の差が出たとか、精微そのものの「」の様な機械の性質に關するエピソードが、およそ門外漢の私達には興深かつた。

それから本館に戻つて正確な電氣時計の裝置拜見。それから愈々待望のドーム樓上の望遠鏡室に入る。みんな初めてで子供らしい好奇心で一杯だ。博士が助手も使はず自らスキツチを切るとギィとさしる音と共に徐々に圓蓋が開いて、現れた秋の夜の蒼穹、危ぶまれた雲が切れてメダルのやうな月だ。日本一と云ふ口径 30cm の眼視式屈折望遠鏡を代る代る窺く。200 倍の月の顔の明るさ、輝いたクリーム色に點々と散る紫紺鮮かな火山帯の陰影、その次に見た土星の輝ける環をもつた姿が異様に美しい。皆なガリレオへの嘆賞を新にした様な美感に打たれてしまつた。

一同厚く博士の厚意を謝して辭す。歸りは月影をたよりに裏山を下つて圓山公園の方へ出た。此の山路の夜は都會の中心まちかとは思へないやうな幽邃さであつた。(A)